

終章 海獣狩猟文化における動物飼養の意義

前章までの検討内容から、サハリンと北海道では、イヌ、イノシシ類、トナカイ、ヒグマが、表 44 に示したような利用内容の変遷を遂げることが明らかであった。このうち、複数世代にわたる所有意識のある動物として体系的に飼養されたとみなせるのは（表 3 における II・b 段階）、イヌ、イノシシ類のみであり、その飼養が発達を見るのはともに、高度に海洋適応を遂げたオホーツク文化期においてであった。なお、民族誌時代に一部地域で盛んに飼養されたトナカイについては、対象とした時代を通じて利用程度が低く、オホーツク文化期以前には飼養されていなかったものとみなせた。また、同じく民族誌時代にアムール河下流域から北海道にかけて「飼いグマ送り」が発達したヒグマについては、オホーツク文化期において幼獣を対象とした一時的な飼養（表 3 における I・b 段階）が行われた可能性が皆無ではないが、現在までに得られている遺存体の内容や古 mtDNA 分析の結果からは、それが体系的に行われたことを裏付ける証拠に乏しいことが明らかであった。

サハリンと北海道で確認されたイヌとイノシシ類の飼養は、出現時期がそれぞれ異なるが、ともに他地域で家畜化された個体が当地域へ移入されたことをもって始まる。すなわち、イヌ、イノシシ類に対する飼養の開始は、周辺地域との関わりや文化展開と密接に関わるものと理解できる。その点では、「大陸系遺物」や「本州系遺物」と称される周辺文化に由来する物質資料と、共通する文化背景を有しているといえる。ただし、飼養動物の受容が物質資料のそれと決定的に異なるのは、移入した後にそれを生かした状態で維持していかなければならない点にある。このような生体の維持には、一般に拘束や給餌が必要であり、さらに、集落内での繁殖を目的とすれば、ある程度以上の個体数の確保や、利用時期や利用個体に対する計画性が求められることになる。そのため、動物飼養という新たな生産活動の導入が、既存の生業体系や生活体系に少なからぬ変容を促したであろうことは容易に想像される。なお、動物を飼養する際に与える飼料が可食蛋白質へと転換する比率は、家畜化が進んだ現代のブタでも 12.5%にとどまるという分析結果が得られているように（野澤・西田 1981）、飼料をそのまま食する方がはるかに効率的であるとさえいえる（註 1）。しかし、それでもなお、イヌとイノシシ類の飼養が受容され、維持された背景には、飼養に係る労力や資源以上の価値が見出されていたからに他ならず、それらの飼養がともにオホーツク文化期に盛行することからすれば、その価値が、海洋的な生活様式を営む上で有益なものであったとする見方の成立する可能性が追求されてしかるべきであろう。

本章では、続縄文時代からオホーツク文化期にかけて、イヌとイノシシ類が飼養されるに至った文化背景やそれぞれが担った役割から、当地域における動物飼養の全体像を明らかにし、それが海獣狩猟文化の成立や発達過程に果たした歴史的役割についての把握に努めたい。

表44 イヌ、イノシシ類、トナカイ、ヒグマの利用内容の変遷

	縄文				続縄文		オホーツク		
	前期	中期	後期	晩期	前半	後半/初期	前期	中期	後・末期
イヌ	他地域からの移入 (一般に小型犬 / 利用内容に斉一性なし) ↓				↑ 北方地域との関わり		特異な出土事例 装飾上腕骨 埋葬犬例 ↓		
イノシシ類	I-a (I-b?) ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ 本州からの断続的な移入						II-b ↑ ↑ ↑ ↑ 大陸からの断続的な移入		
トナカイ	I-a ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑						I-a ↑ ↑ ↑ ↑ 北海道へ角や角製品が渡る		
ヒグマ	I-a ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑						↑ ↑ ↑ ↑ 骨塚資料の増加		

- I-a 複数世代に対する所有意識がなく、生存状態での拘束が認められないもの
- I-b 複数世代に対する所有意識がなく、生存状態での拘束が認められるもの
- II-a 複数世代に対する所有意識があり、生存状態での拘束が認められないもの
- II-b 複数世代に対する所有意識があり、生存状態での拘束が認められるもの

第1節 イヌ飼養に見る文化背景とその価値

イヌ飼養は、縄文時代前期にまで遡るが、その利用内容に大きな変化が生じたのは、縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭および前半期においてである。この時期には、礼文島や利尻島、釧路市でイヌの遺存体が多量に出土する遺跡が複数例確認されている（種屯内遺跡調査団 1998～2002、北海道釧路市教育委員会 1999、西本編 2000、北海道礼文町教育委員会 2001）。これらのイヌについては、すでに第3章で検討したように、その出土状況や傷、年齢構成などから、若い個体を対象とした肉や毛皮の採取が行われ、使役用としては利用されていなかったことが明らかであった。また、これらの中には、縄文時代には認められなかった比較的大型で顔幅の広い個体が含まれていたことから（内山・松村 1997、北海道釧路市教育委員会 1999）、利用内容と形質的特徴の双方において、縄文文化にその系譜を求めることが困難であるとみられた。

このイヌ利用の画期ともいべき縄文時代晩期末葉から続縄文時代前半期にかけての時期は、北海道の文化が、この後、アイヌ文化まで続く「北の文化」（藤本 1982：4頁）としての独自性を強めていく時期にあたる。事実、続縄文時代には、舌状の張り出し部を付設した竪穴住居（宇田川 1982）や、顕著な発達を遂げた骨角器類（木村 1982）のように、本州以南とは異なる文化要素が数多く見出されている。動物利用の面でも、縄文時代後・晩期を中心に本州側から盛んに取り入れられたイノシシ類の供給が急激に減退し（第4章参照）、本州以南に生息しないヒグマを模った意匠遺物の増加が顕著となる時期でもある（第6章参照）。縄文時代以来の本州以南との関わりは、副葬品として用いられた碧玉製管玉（青野 1999）や南海産の貝製品（大島 1989）のような精神文化に関わる文化要素を中心に依然続いているが、これらの弥生的要素は主として道西南部に認められており、本州以南との関わりが相対的に希薄な道東北部とは、対立的な様相を示している（大島 2002）。また、この時期は、宗谷海峡をおおよそ北限とした縄文文化（杉浦 2001）（註2）が終焉を迎え、続縄文文化がサハリン南部でも展開し始める時期にあたる。このような文化背景の中で、縄文時代とは系譜の異なる形質的特徴を具えたイヌや、それ以前には認められなかった肉や毛皮の採取を目的としたイヌ利用が、道東北部において出現を見たのである。このイヌ利用の類例は、続縄文文化圏外のサハリン中部でも認められていることから、続縄文文化とより北方に位置する文化との関わりの中で新たに出現した可能性が高いとみなせる（内山 2003a）。

続縄文時代において、大陸を含めたより北方の地域との関わりを示す遺物としては、金属器や土器を挙げることができる。このうち、羅臼町植別川遺跡（羅臼町教育委員会 1981）の2号墓から出土した続縄文時代初頭に属する銀製品は、鉄製刀子に付着していたことから、刀の鞘か刀の収納箱の装飾部分とみられている。藤本強氏（1986）や菊池俊彦氏（1992）によれば、銀製品は遊牧民族である匈奴や鮮卑の墓から多く出土しており、弥生文化では佐賀県惣座遺跡から出土した中期に属する銀製指輪が最古であるという（涌坂 2003）。その

ため、既知の資料に基づけば、植別川遺跡の銀製品が日本列島での最古の事例と位置づけられ、これについては大陸側から北方ルートでもたらされた可能性が高いとみられている（藤本 1986、菊池 1992）。植別川遺跡の 2 号墓からは、上記の銀製品が付着した刀子以外に、もう 1 点、鉄製刀子が出土している（羅臼町教育委員会 1981）。道東部ではこの他にも、釧路市貝塚 1 丁目遺跡の 2 号墳墓から縄文時代晩期末葉に属する小鉄片が得られており（河野 1973）、これについても、大陸の初期鉄器時代の文化から北方ルートでもたらされた可能性が指摘されている（加藤 1975、菊池 1992、本間 1995）。また、例数は限られるが、サハリン中部以北の東海岸に主要な分布域を持つザーパトナヤ 10 タイプ土器（II 群）が、サハリン南部で出土する例が確認されている（木村 1989、Федорчук 1998）。この他にも、続縄文時代の前半期に位置づけられるプレドリェフリャンカ段階の土器にみられる列点状の型押文や短刻線、突瘤文が、サハリン中部のザーパトナヤ 10 タイプ土器（Федорчук 1998、木山他 2003）からの影響を受けたとする見解も出されている（小野・天野 2002）。

以上のように、縄文時代晩期末葉から続縄文時代前半期にかけて、北方との関わりを示す事例はいくつか見られるが、これらはいずれも物質資料であり、ここに生業であるイヌ利用が新たに追加された意味は大きい。なぜなら、イヌはもともと飼養しやすい動物の一つではあるが、その大量飼養の段階に入ると、生体の維持や利用の計画性など、狩猟採集活動とは異なる労力や技術が不可欠になったとみられるからである。なお、当該期にイヌの遺存体が多量に出土した遺跡のうち、釧路市幣舞遺跡以外の礼文島や利尻島に所在する遺跡では、竪穴住居址が検出されておらず、その中には、利尻町種屯内遺跡のように、海獣類の遺存体を欠くことから、夏季のキャンプ・サイトとみられる遺跡も含まれている（種屯内遺跡調査団 2004）。これを補完するような冬季を中心に利用されたとみなせる遺跡はまだ確認されていないが、遺跡間の移動の際にはイヌが伴われた可能性が高い。さらに、この時期には、道北部とサハリン南部とが土器や集石土坑などの複数の文化要素を共有した一つの地域文化圏を形成することが知られており（前田 1999、Василевский 2002、木山 2003、2004）、舟にイヌを載せて宗谷海峡域を移動する場面もあり得たかもしれない。なお、当該期には、北海道産の黒曜石がサハリン南部や中部の遺跡で出土しており（註 3）、双方向的なモノの交流の行われていたことが分かる。

当該期におけるサハリン北部やアムール河下流域でのイヌ利用の様相は不明だが、イヌを食料資源などとして多量に利用する事例は、沿海州に所在する初期鉄器時代のヤンコフスキー文化に属するペスチャヌイ遺跡でも確認されている（Ермолова 1963）。空間的隔たりが大きいため、続縄文文化圏内の道東北部で認められたイヌ利用との関連性の有無については不明だが、巨視的に見て大陸側を起源とする新たな経済体系が、金属器などとともに、北方ルートで日本列島へもたらされた可能性も想定できよう（内山 2003a）。そして、このような北方との関係が顕著となった背景には、①続縄文文化が宗谷海峡を越えたサハリン南部で展開し始めたことや、②北海道と本州以南との関わりが縄文時代に比べて相対的に薄れたこと、さらに、③藤本強氏（1986）が「漢帝国の成立とその北方への進出」（263 頁）

を挙げたように、大陸側での何らかの情勢が複合的に関与した可能性が考えられる。なお、ペスタヤヌイ遺跡では、出土獣類の半数以上を飼養されたイノシシ類が占めるが（Ермолова1963）、続縄文文化圏内ではこれまでのところ、北方ルートでイノシシ類がもたらされた例は確認されていない。このことから、巨視的には大陸側を起源とする経済体系の波及によってイヌ飼養が出現したことを想定できるとしても、その影響は間接的なものにとどまったとみなすことができよう。

続縄文時代への移行期に道東北部で出現を見たイヌ利用は、オホーツク文化期のそれと、形質的特徴においてもその利用内容においても類似性がきわめて高く、両時代のイヌ利用には系統関係を認めることができる。このような続縄文時代におけるイヌ利用の盛行は1990年代以降の調査で明らかになったものであり、それ以前には、オホーツク文化期の初期にあたる鈴谷期がこのようなイヌ利用の出現期とみられていた。鈴谷式土器に伴って出土したイヌは、その形質的特徴から「シベリヤ犬」（伊東 1942：42 頁）とみなされ、その起源を大陸に求める見解が出されている。菊池俊彦氏（1976）のまとめたオホーツク文化期の大陸系遺物の一覧中に、イヌが列挙されているのもこのためである。しかし、前述したように、オホーツク文化期のイヌ利用が続縄文時代のそれを継承した可能性が高いことからすれば、鈴谷期に新たな形質的特徴を具えたイヌと利用内容とが大陸側から導入されたという論は成り立ち難いことになる。この結果、鈴谷期には、大陸系遺物が北海道では認められないことになり、サハリンでもガラス玉や軟玉製環状石のみに限られることとなる。したがって、オホーツク文化の特異性であり、その基本的性格を構成する重要な要素とされる、(1)海獣狩猟を生業形態の一つとすることと、(2)大陸由来の要素が存在すること（前田 1976）、のうち、後者については、初期にはその存在がほとんど認められないことが明らかである。これは、同文化の形成が、宗谷海峡域という大陸とは距離的に離れた地域を舞台としたこととも決して無関係ではなかろう。つまり、オホーツク文化は基本的な構成要素の多くを続縄文文化から引き継ぐことで形成されたとみなすことができるのである。

縄文時代晩期末葉から続縄文時代初頭に道東北部で出現し、後続するオホーツク文化期に継承されたイヌは、出土状況や年齢構成、傷などの検討から、猟の補助や運搬といった使役には用いられずに、比較的若い段階で殺され、肉や毛皮の採取が行われたことが明らかである。イヌの肉や毛皮は質・量ともにそれ程優れているわけではないが、イヌは人間の手元で維持されたことから、その利用時期を人間の主体的な意図で決定できるという、他の獣類にはない利点を持つ。イヌが担った用途のうち、「生かしておくこと」により大きな意味が認められるのは、肉の採取においてであり、それによって成し得た「生きた保存食料の確保」が、イヌ飼養を行った第一の目的であったとみなすことができよう。

動物飼養は、食料の貯蔵技術と並んで、狩猟採集民が不測の事態（天候不順や不漁・不猟）に対処するためのリスク回避の方法として最適なものである。特に、北東アジア沿岸のような寒冷な環境下での漁撈や海獣狩猟に際しては、天候による影響を陸上での生業活動以上に受けやすく（註 4）、保存食料としてのイヌが寄与する部分は、カロリーや蛋白質

の摂取量に占める比率以上に大きかったとみなすことができる。高度に海洋適応を遂げた文化として知られるオホーツク文化は、その母胎となる縄文文化の段階からすでにイヌ飼養を具えており、その導入によって生きた保存食料の確保を成し得たことが、宗谷海峡域の集団に、より海洋的な生活を志向させる契機の一つとなったことが考えられよう。また、イヌ飼養は、縄文時代初頭からオホーツク文化期を通じて、礼文島や利尻島という島嶼地域で顕著に発達を遂げたが、これは、イヌという飼養動物の保有が、島嶼地域に特有である陸獣類の欠落を補完したものとみなせよう。

第2節 イノシシ類飼養に見る文化背景とその価値

イノシシ類の出土は縄文時代前期にまで遡り、その利用は、縄文時代後・晩期にピークを迎える。このイノシシ類については、生息圏外での出土であるために、他地域から持ち込まれたことが明らかである。その供給元は、分布域が道南半部に偏ること（第4章参照）や、古 mtDNA 分析（石黒・山崎 2001）の結果から、本州側であると推測される。この時期のイノシシ類の一部については飼養されたものであるという見解が出されているが、第4章で検討したように、供給地である本州側で飼養や生け捕り猟の存在が実証できていないことや、北海道が独自性を強める縄文時代に入って急激に出土量を減ずることから、北海道内で繁殖集団として安定的に維持されていた可能性は低く、基本的には本州側から、儀礼に供したり道具の素材として用いたりするために、随時、遺体の移入が図られていた可能性が高い。したがって、対象地域におけるイノシシ類の体系的な飼養は、オホーツク文化期に出現を見たということができよう。

オホーツク文化期には、前期の十和田期以降にイノシシ類の出土が認められており、これらについては、形態的特徴や古 mtDNA 分析の結果から、大陸側から持ち込まれたものとみられている（直良 1937、石黒 2000、石黒他 2001、Watanobe et al.2001）。十和田期におけるイノシシ類の出土量は限られているため、例え生体が持ち込まれていたとしても、繁殖集団として維持されていたとはみなし難い状況にある。菊池俊彦氏（1976）による大陸系遺物の集成によれば、十和田期にはこのイノシシ類の他に、大陸系遺物はイヌしか見出されていない。ただし、イヌについては、前節ですでに論じたように、縄文時代晩期末葉から縄文時代初頭に導入が図られており、オホーツク文化期の初期や前期に断続的に大陸側からイヌを取り入れたとする積極的な根拠に欠ける。そのため、前期に属する大陸系遺物は少量のイノシシ類のみということになり、初期と同様に、大陸的要素の存在が希薄であることが明らかである。この時期のオホーツク文化の分布域は、初期と同様に、基本的に宗谷海峡域にとどまるため、大陸との空間的ギャップはまだ大きく、それが大陸的要素の限られた主要因とみなせよう。なお、オホーツク文化で確認されているもっとも古いイノシシ類の出土事例は、礼文町香深井 1 遺跡（大場・大井編 1976、1981）の魚骨層 V

で認められた資料であり、十和田期の中でも土器に刺突文が多く施される新段階（天野 1998）に属する。一方、オホーツク文化圏外に所在するサハリン中部のザーパトナヤ 12 遺跡では、ザーパトナヤ 10 タイプ土器とともに、亜成獣の上顎骨 1 点が得られている（註 5）。この上顎骨がザーパトナヤ 10 タイプ土器のうちのいずれの細分型式（木山他 2003）に伴うのかは定かでないが、仮にこれをもっとも新しいⅢ群段階とみなしたとしても、編年上、十和田期の新段階より古く位置づけられることになる。すなわち、オホーツク文化圏内にイノシシ類の移入が図られる以前から、より北部の地域では、イノシシ類が大陸側から受容されていたものとみられ、十和田期に認められたイノシシ類も、サハリン中部以北を介して間接的に受け入れられた可能性を考慮する必要がある。

イノシシ類の出土量は中期以降に増加する傾向を示し、繁殖集団としての維持が想定し得るようになる。これは、この時期にオホーツク文化が分布域を拡大し、供給地と目される大陸側との距離が縮まったことと不可分な現象ではない。この時期には、靺鞨文化からの影響により、刻文土器や江ノ浦 B 式土器と呼ばれる頸部のくびれの明確な壺形土器が出現し（加藤 1975、前田 1976、菊池 1976）、軟玉製環状石やガラス玉、管玉、平柄鉄斧、曲手刀子、耳飾りといった大陸系遺物も数多く認められるようになる（菊池 1976）。このような大陸側との関係の深まりの中で、同じく大陸に由来するイノシシ類の出土量が増加する傾向を示したことは、決して偶然的なことではなからう。なお、イノシシ類は、イヌに比べて人に馴れる性質が弱いが、同文化圏内ではすでにイヌ飼養が行われていたために、その導入に際しては、それほど大きな困難さを伴わなかったものと考えられる。

イノシシ類は、ごく一部の例外を除いて、一般に食肉用の動物と位置づけられており（Bökönyi 1974）、オホーツク文化期に属する出土資料を集成した結果からも、それが食料資源として利用されたことが明らかであった。これらは、イヌと同様に、ある程度の期間、飼養された上で利用されたとみられるため、人間が自らの意図で利用時期を決定できる「生きた保存食料」としての役割を担っていたとみなすことができる。

サハリンでは、動物遺存体が定量的に分析された遺跡が限られているが、中期（江ノ浦期）のリュトガ 3 遺跡やソロビョーフカ遺跡、後・末期（南貝塚期）のカミサンノサワ遺跡や同じく後・末期（東多来加期）のプロムイスロヴォエ 2 遺跡（内山 2002a、b）、詳細な所属時期が不明なイワノフカ遺跡（Арексеева・Голубнова 1993）の出土内容からは、イノシシ類の出土量が特に多い傾向を認めることができる（註 6）。北海道でも、礼文島や利尻島を中心にその出土が認められているが、出土獣類に占める割合はサハリンに比べて低いようである（註 7）。これには、供給地と目される大陸側との空間的距離が関係しているものとみられ、イノシシ類が担う役割の大きさには地域差を認めることができる。そのため、保存食料という共通した役割を担ってはいいても、その出土割合の低い北海道側では、天野哲也氏（1977）が指摘するように、「嗜好品」（114 頁）的な意味合いがより強かったのかもしれない。しかし、それがそのまま、イノシシ類に対する精神的価値の向上にはつながらず、一貫して実用動物にとどまったことは、イノシシ類の遺存体が動物儀礼の痕跡

である骨塚に含まれず、食料残滓とみられる出土例で占められていることや、遺存体を素材とした製品やイノシシ類を模った意匠遺物を基本的に欠くことから明らかである。これは、イノシシ類の出土割合が海獣類以上に高いサハリンでも同様であり、オホーツク文化が動物飼養という生産活動を盛んに採り入れてはいても、あくまでも狩猟採集を主軸とした狩猟採集文化の一つとして、ヒグマや海獣類をはじめとした野生獣に高い精神的価値を見出していたことの証左といえよう。

なお、イノシシ類の出土量が増す中期以降には、リュトガ 3 遺跡やカミサンノサワ遺跡のように、イノシシ類の遺存体が出土獣類の主体を占める一方で、イヌの遺存体が少量しか出土しない遺跡が認められるようになる（註 8）。これは、イヌとイノシシ類が「生きた保存食料」という重複する役割を担ったために、肉量が多く、食料資源としてイヌより優れているイノシシ類を選択する遺跡が出現したことを示しているのではなかろうか。このような現象は、沿海州でも認められており、豆満江流域では、紀元前 2 千年紀にイノシシ類より出土量の上回っていたイヌが、紀元前 1 千年紀以降には、イノシシ類の増加に伴い、出土量が減少したという（大貫 1998）。オホーツク文化期において、イヌとイノシシ類がともに多く飼養されている遺跡は、礼文町浜中 2 遺跡（前田・山浦 2002）や同香深井 1 遺跡（大場・大井編 1976、1981）をはじめとした礼文島、利尻島に所在する遺跡や、プロムイ スロヴォエ 2 遺跡（内山 2000、2002a、2002b）など、少数の遺跡に限られる。このような遺跡では、イヌの上腕骨に装飾が施された例や、全身骨のうちの前肢骨のみを欠いた例、クジラ祭りに多数の頭部が供献された例、埋葬犬を中心とする一連の儀礼が執り行われた例など、イヌに特異な出土事例が見出されることが多い。これは、イヌに対してイノシシ類とは異なる何らかの価値が新たに見出されたことを示唆しているが、そのような遺跡でも、イヌの年齢構成は若い個体に偏ることから、狩猟の補助や橇の牽引などの使途が付加されたわけではないことが明らかである。なお、前述したように、イヌとイノシシ類とともに飼養した遺跡の中には、礼文島や利尻島に所在する遺跡が多く含まれるが、これは陸獣類の少ない島嶼地域という特殊な環境が、より多くの飼養動物を求めた結果とみなせよう。

第 3 節 動物飼養の地域的偏在

イヌやイノシシ類を対象とした動物飼養は、オホーツク文化圏内で一様にみられるものではなく、それが盛行するサハリンから礼文島、利尻島までの地域と、あまり普及しない北海道本島との間に明瞭な地域差を認めることができる。前述したように、イヌとイノシシ類は、飼養することによって、その利用時期を人間側の主体的な意図で決めることができる「生きた保存食料」としての価値を有する。そのため、ここで見出された地域差は、オホーツク文化の生業活動や食料資源に関わる問題として検討する必要がある。なお、動

物飼養については、北海道での出土例が限られていたために、同文化における特異な経済基盤であるとの認識が示されてきた（直良 1938、1941、Ohyi1975、大井 1981）。しかし、近年のサハリンでの調査・研究活動の進展によって、イヌやイノシシ類の遺存体が多く確認されるに及び、動物飼養という生業が同文化において重要な位置づけにあったことが明らかになりつつある（内山 2002a、b）。

本研究で対象地域としたサハリンと北海道はともに、津軽海峡に引かれた生物分布の境界線であるブラキストン線（徳田 1969）の北部に位置し、生息する動物種の多くが共通している。ただし、両島嶼は、12,000 年程前に形成された宗谷海峡（大嶋 1977）によって隔てられていることから、動物相の一部で異なる様相を示すことが知られており（樺太庁博物館 1937、犬飼 1943、徳田前掲書）、縄文時代以降に利用された主要な動物では、北海道に生息するエゾシカがサハリンでは生息せず、サハリンに生息するトナカイを北海道では欠いている。小形動物や中形動物の中にもサハリンと北海道で生息種に差異の認められる例があるが、これらの利用目的は食料資源というよりはむしろ、毛皮採取にあるとみられるため、ここでは取り上げないこととした。

動物飼養を盛んに行った地域のうち、礼文島や利尻島では、ヒグマやエゾシカといった大形の陸獣類が生息していないため、陸獣類の出土量は少量に限られる。また、サハリンでは、トナカイやヒグマが生息しているにも関わらず、第 5 章、第 6 章で示したように、それらの出土は少量ずつしか確認されていない。一方、動物飼養をあまり行っていない北海道本島では、ヒグマの出土量が特に後期において多く（第 5 章参照）、エゾシカも常呂町栄浦第二遺跡（東京大学文学部 1972、常呂町教育委員会 1995）や、湧別町川西遺跡（北方民族博物館 1995）、根室市弁天島遺跡（根室市教育委員会 1966）などで割合多く確認されるなど、島嶼に所在する遺跡を含めて、前者の地域よりは陸獣類が多く見出される傾向にある。また、海岸付近に遺跡を形成していることから明らかなように、オホーツク文化全体では、外海や湖、河川を舞台としたさまざまな形態の海洋および内水面での生業活動が周辺環境に応じて営まれており（内山 2002a、b）、漁撈や海獣狩猟といった水域での生業活動が主体的になされていたことが見て取れる。以上のような地域ごとの生業の特徴を整理すると以下のようなになる。

表 45 オホーツク文化における地域ごとの生業の特徴

	サハリン		礼文・利尻		北海道本島
水域【漁撈】	主体	=	主体	=	主体
【海獣狩猟】	多い	=	多い	=	多い
陸上【動物飼養】	多い	=	やや多い	⇔	少ない
【陸獣狩猟】	少ない	=	少ない	⇔	やや多い

以上の整理した表からも明らかなように、サハリンから礼文島、利尻島にかけての地域で発達を見た動物飼養は、北海道本島で行われた陸獣狩猟と、生業体系の中で類似した位置づけにあるとみなすことができる。すなわち、オホーツク文化圏の全域では、豊富な水産資源を背景とした漁撈や海獣狩猟といった水域での生業活動が主体的に行われており、それに、陸上で行われる動物飼養もしくは陸獣狩猟を加えることによって、複合的な生業体系を実現させ、不測の事態に備えた食料資源の安定的確保が図られたものとみなせる。なお、動物飼養と陸獣狩猟がともに多く行われた遺跡はこれまでのところ確認されていないため、それらのうちのいずれかが、遺跡の地理的・文化的位置や自然環境、社会的要因などに応じて選択されたものとみられる。つまり、イノシシ類の供給地と目される大陸側に近いサハリンや陸獣類が元来少ない礼文島や利尻島では、動物飼養が陸獣狩猟より優先され、一方、北海道本島では、特に遠隔地域から移入しなければならないイノシシ類について積極的な導入が図られなかった代わりに、精神的価値に加えて、交易品としての価値を持ち得た可能性のあるヒグマをはじめとする陸獣狩猟が前者の地域より高い比率で行われたのではなかろうか。

動物飼養が発達した礼文島や利尻島は、北海道本島やサハリンから、直線距離で 20～90km 程も離れた日本海上に位置する。これらの島嶼は面積的にも狭く、島内で利用可能な陸上資源が限られていることは明らかである。ここでは、縄文時代から遺跡の形成が認められているが、続縄文時代への移行期からオホーツク文化期にかけての時期には、特に多くの遺跡が残されている。この時期は、イヌ飼養が導入され、その後、イノシシ類飼養が追加された時期でもある。このように、陸上資源の限られた礼文島、利尻島といった島嶼地域で遺跡の形成が活発化した背景には、当地域における豊富な水産資源の存在や、それを効率的に捕獲する技術や航海術の向上、鉄器の確保とともに、動物飼養の導入によって成し得た生きた保存食料の確保が深く関与した可能性が考えられよう。

なお、北海道本島で特にイノシシ類飼養が普及しなかった背景については、当地域に流氷が接岸するために冬季に漁撈があまり行えず、飼料となる魚類の確保ができなかったためとする見解がある（西本 1978）。しかし、序章でも述べた通り、同文化期における生業カレンダー（図 2、3）には検討の余地が多くあり、道東部に流氷が接岸する 2、3 月を中心とする真冬の時期に、道北部で積極的な漁撈が行われたとは断定できない（註 9）。加えて、保存加工の存在を考慮すれば、季節ごとに食料資源の不均衡がどの程度生じていたのかを判断するのは難しい。また、飼養動物に与えた飼料の内容や量について、考古学的に論証することは困難であるが、民族例を見ると、サハリンアイヌでは、乾したマスやニシンをイヌの飼料とし（知里 1973、）、ニブフでは、サカナとアザラシの脂肪や、乾燥や燻し、凍結によって保存加工されたサケをイヌに与えたことが知られる（Крейнович 1930、ivanov 1956、服部 1997）。また、その量については、サハリンアイヌとアリユートの例で、イヌ 1 匹に対して一日にサカナ 1 尾半を与えるとの記載がみられる（葛西 1997、南満州鉄道株式会社編纂 1929）。このうち、アリユートの例では、イヌは橇の牽引用として多量に飼

養されていたため（ベーリング島で 400～500 個体程度）、給餌に係る負担はかなり大きいとされる（南満州鉄道株式会社編纂前掲書）。しかし、出土資料で見る限り、オホーツク文化期において、一時期に飼養されたイヌやイノシシ類の個体数がアリュートの例程多量であったとは考え難く、また、飼料として、サカナの骨や腐敗物などといった人間が食することのできないものを与える例のあることからすれば（Крейнович1930、知里 1973、服部 1997）、飼料の確保がそれ程困難ではなかった可能性もあろう（註 10）。以上の点から、北海道本島で動物飼養が積極的に採り入れられなかったのは、飼料の問題ではなく、前述したように、陸獣狩猟の存在や、イノシシ類の供給地との空間的距離に起因するものとみなすことができよう。

動物飼養を積極的に採り入れなかった北海道本島では、水域と陸上の双方において、狩猟活動が行われたことが明らかである。これまでのところ、オホーツク文化期における性的分業の有無について具体的に検討する材料を欠くが、一般に狩猟採集民は屋外での活動を男性、家内での活動を女性が行う傾向にあるとされる（註 11）。これに基づけば、北海道本島では、水域での海獣狩猟や漁撈に加えて、陸上での狩猟も男性が担ったことになり、狩猟の場となる水域と陸上における自然環境や対象獣に関する知識はもちろん、対象獣に合わせた道具類や狩猟技術が必要になったものとみなせる。一方、サハリンから礼文島、利尻島にかけての地域では、男性は主として漁撈や海獣狩猟といった水域での生業活動に専念し得ることとなり、この差異が同文化における狩猟・漁撈技術の展開や動物観などに何らかの影響を及ぼした可能性が考えられよう。

第 4 節 大陸系遺物の出土傾向に見るオホーツク文化の地域差

オホーツク文化期に飼養されたイノシシ類は、大陸由来の動物であるため、アムール河中・下流域からもたらされることの多い「大陸系遺物」（菊池 1976）の一つとして取り扱われることがある（菊池 1976、山田他 1995）。大陸系遺物のうち、物質資料については、高島孝宗氏（1998）が菊池俊彦氏（1976）の分類を基に、以下の 3 種に分類している。

- I 装身具：青銅製帯飾、青銅製鐸、青銅製/鉄製鈴、金属製耳飾り、軟玉製環状石、ガラス玉
- II 武具：曲手刀、鉄製鉞
- III 生活用具：曲手刀子、平柄鉄斧

高島氏（1998）は、北海道の出土資料に限って、これら I～III の資料の分布について検討を加えている。その結果、I の装身具は礼文島から根室半島にかけて広域に分布しているが、その出土は、枝幸町目梨泊遺跡と網走市モヨロ貝塚に偏在する傾向を示す（図 70）。また、II の武具は、目梨泊遺跡とモヨロ貝塚に出土が限られる（図 71）。III の生活用具のうち、曲手刀子は大陸系遺物の中でもっとも出土量の多い遺物であるが、分布と出土量にはあまり偏りが認められない（図 72）。この結果から、高島氏は、I、II の非日常用具が北海

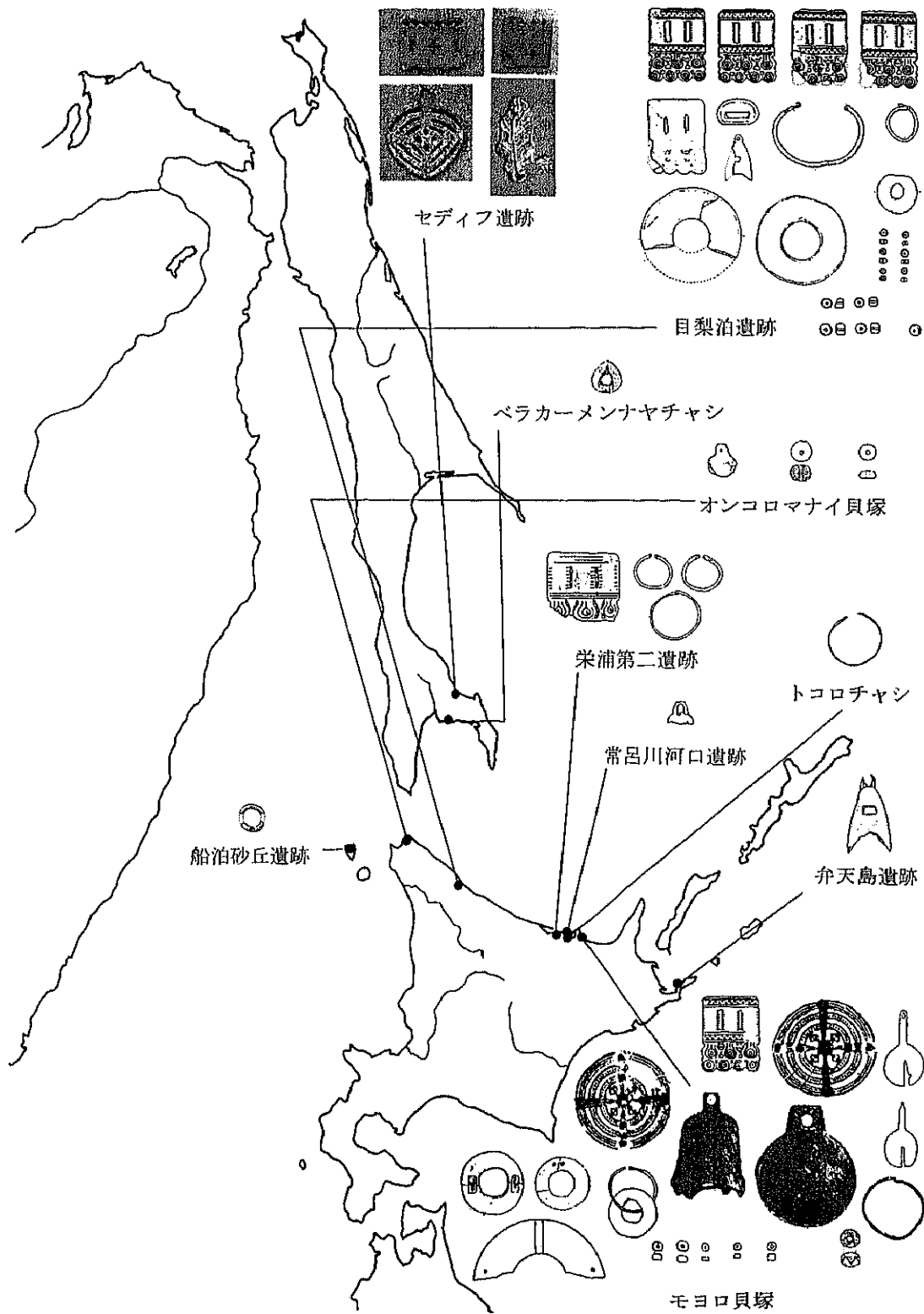


図70 大陸系遺物（1）装身具

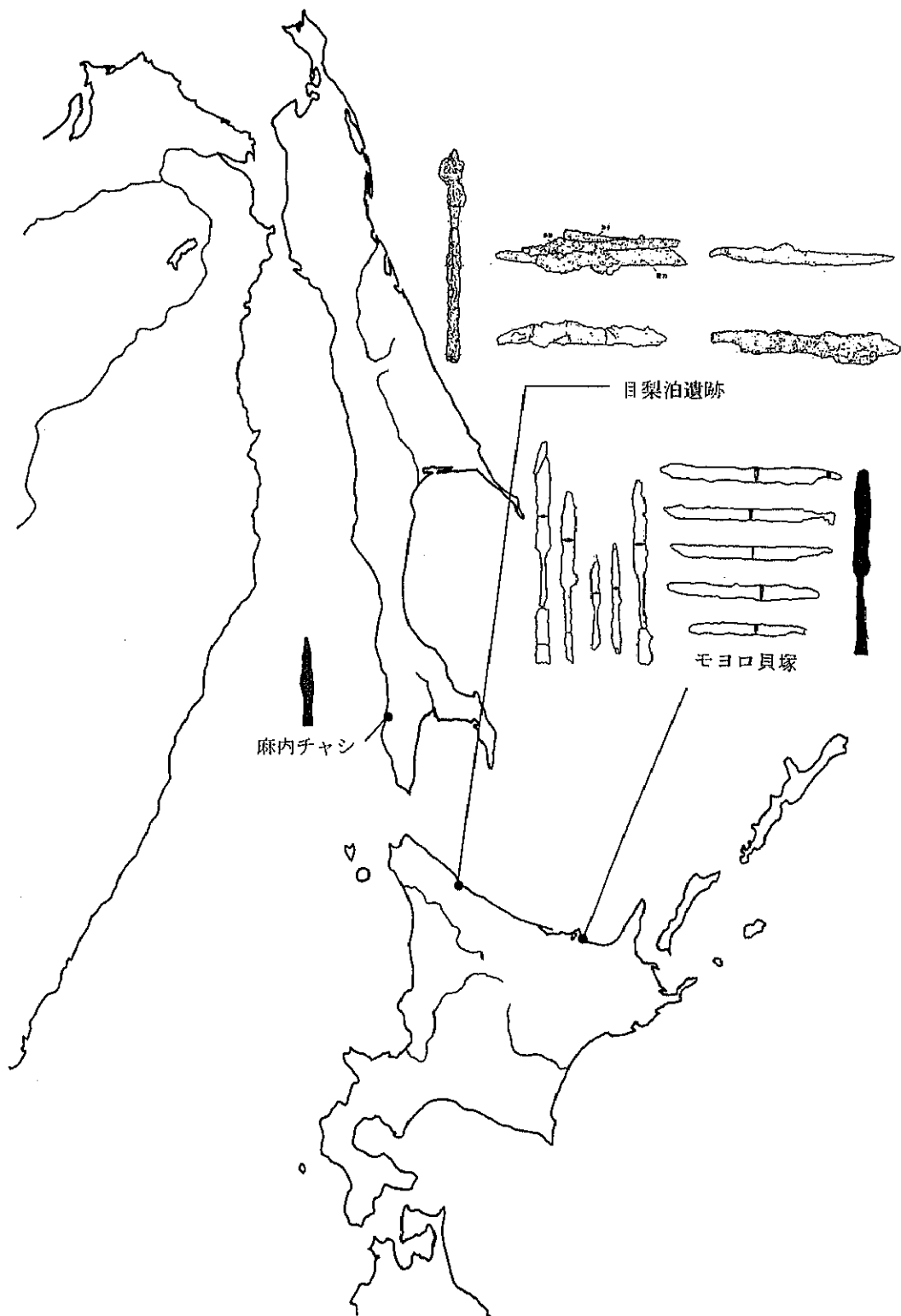


図71 大陸系遺物 (2) 武具

道本島の一部遺跡に偏在することを指摘するとともに、それらを基本的に欠く礼文島・利尻島を「欠如地域」（高島 2003：171 頁）と位置づけている。サハリンでは、調査密度の問題かもしれないが、これまでに見出されている大陸系遺物は少なく、南部のセディフ遺跡から後・末期の南貝塚期に属する青銅製帯金具が 4 点（天野 2004）（図 70）、ペラカーメンナヤチャシから同じく南貝塚期に属する青銅製帯金具が 1 点（右代他 1998）（図 70）、また、所属時期が不明であるが、麻内チャシから鉄製銚が 1 点（天野 2004）（図 71）得られているに過ぎない。セディフ遺跡の青銅製帯金具は、その形態から、アムール女真（パクロフカ）文化に属する資料とされ（天野 2003b、2004）、「方形透彫帯金具Ⅵ期」（臼杵 2004）（表 1）に編年づけられる。臼杵勲氏（2004）によれば、この「方形透彫帯金具Ⅵ期」は、紀元後 10 世紀～11 世紀初頭という実年代が想定し得るといふ。この他、北海道側で出土している青銅製帯金具はいずれも「方形透彫帯金具Ⅱ期」（臼杵 2004）（表 1）にあたる資料であり、セディフ遺跡の資料よりも古い型式である。

一方、第 4 章や本章の前節ですでに論じたように、大陸由来のイノシシ類の出土は、サハリンから礼文島、利尻島までの地域にほぼ限定されており、上記のⅠ装身具やⅡ武具といった非日常用具の分布範囲とは基本的に重複しない。前述したように、イノシシ類は、オホーツク文化において食料資源（生きた保存食料）としての役割を担っていたことが明らかであるため、礼文島や利尻島には、大陸系遺物のうち、主として日常生活に関わるものがもたらされる傾向にあったとみなすことができよう。ただし、礼文島では、船泊砂丘遺跡から青銅製耳飾りが 1 点のみではあるが出土しており（児玉・大場 1952）（図 70）、また、大陸系とは断定できないため図には加えなかったが、利尻島に所在する利尻富士町役場遺跡（北海道利尻富士町教育委員会 1995）でも、青銅製とみられる「円形の垂飾用金具の一部」（60 頁）が、鈴谷式土器を多く出土する第 3 層より得られている。さらに、礼文島では、装身具や武具といった非日常的な大陸系文物を模倣したとみられる骨製品や角製品が複数確認されている（図 73）。これらの模倣品のうち、もっとも古い事例は、十和田式土器や刻文土器を包含する礼文町香深井 1 遺跡（大場・大井編 1981）の魚骨層Ⅳから得られており、実物が出土していないにも関わらず、比較的早い段階からそれらの存在が認識されていたことは確かといえよう。なお、前述したように、サハリンでは大陸系遺物の出土が限られているが、このうち、セディフ遺跡の帯金具は紀元後 10 世紀～11 世紀初頭を遡らないとみられ、北海道側ですでに大陸系遺物の出土が認められなくなる時期にあたっては注目される。今後、サハリンでも、より古い時期に属する大陸系遺物が出土する可能性はあるが、これまでのところ、北海道側での出土資料より新しい時期の資料に限られているといえよう。

サハリンから礼文島、利尻島までの地域は、大陸と北海道本島との間に位置している。そのため、大陸系遺物の中に、この地域を経由して北海道本島にまでもたらされたものがあつたことは十分に考えられる。ただし、大陸により近いこれらの地域で、これまでのところ、大陸系遺物のうちの非日常用具がほとんど認められていないのは明らかな傾向であ

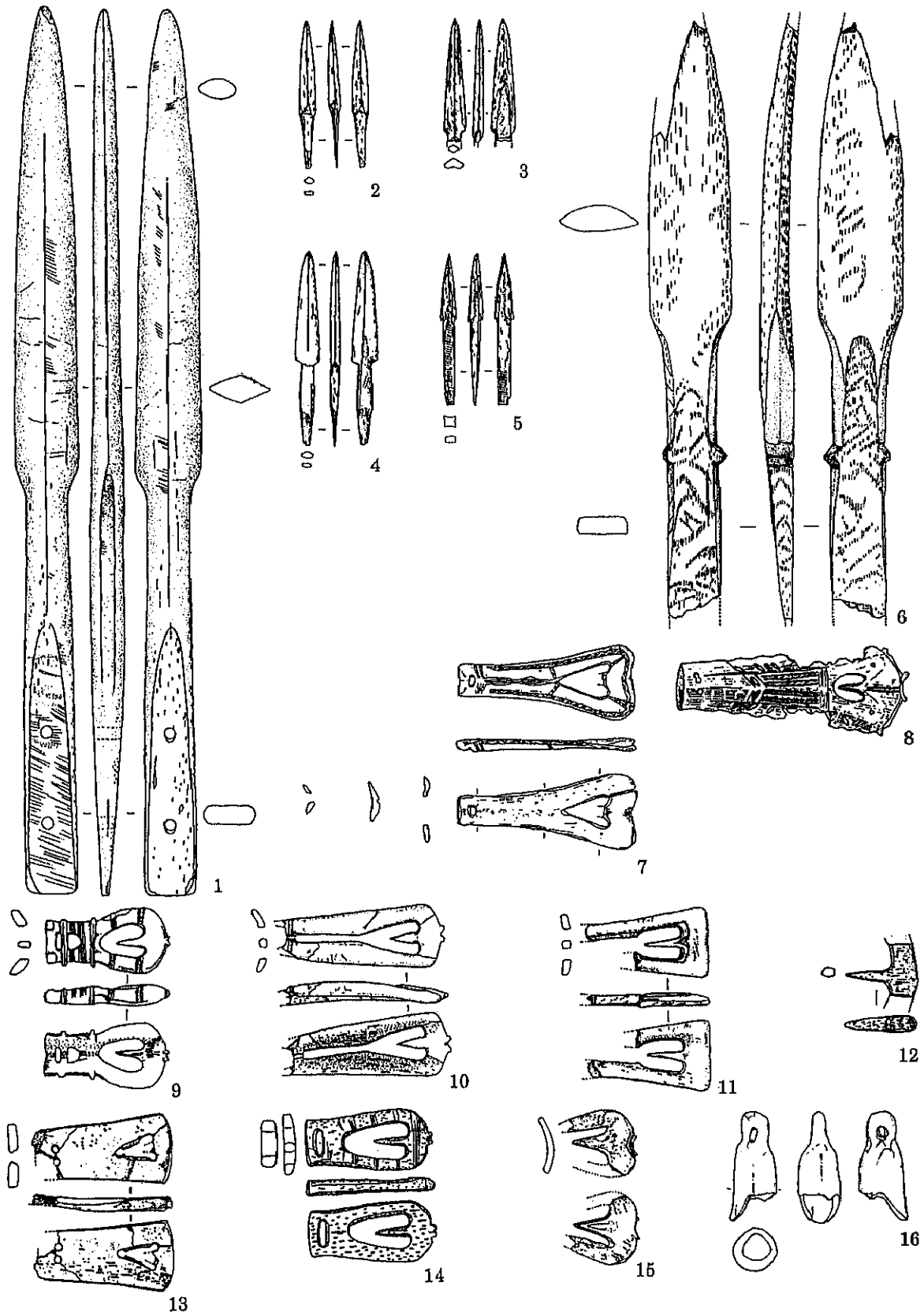


図73 大陸系文物の模倣品

1: 骨製鏃 2~5: 骨製鏃 6: 骨製槍 7~15: 帶飾 16: 土製鐸 (縮尺 1/3)

る。このことは、これらの地域の住民が、大陸と北海道本島との間でなされた非日常的な文物の交流において、仲介者としての役割を担うことがあっても、自らは日常的に必要なイノシシ類や曲手刀子などを選択的に入手していた可能性を示唆していよう。

以上のように、イノシシ類飼養に認められた地域差は、大陸系遺物のうちの非日常用具に見る地域差と、対称的な傾向を示すことが明らかであった。このような地域差は、前節で論じた生業体系や、ヒグマ利用の内容やその文化内での位置づけ（第 6 章参照）においても見出すことができる。そしてこのことは、オホーツク文化において、生業体系や大陸との関わり、動物観などの複数の文化要素で地域差が存在することを示しており（表 46）、オホーツク文化の全体像を把握する上で、きわめて重要な特徴とみなし得る（註 12）。

表 46 各文化要素に見るオホーツク文化の地域差

	サハリン	礼文・利尻	北海道本島
【生業体系】		水域での生業 動物飼養	陸獣狩猟
【大陸系遺物(非日常用具)】		少ない	一部遺跡が多い
【大陸系遺物(日常用具)】	なし		あり
【住居内骨塚】	なし		あり
【ヒグマを横った遺物】		少ない	多い

第 5 節 飼養動物の種類と利用内容に見るオホーツク文化の特質

本研究で対象とした時代に、サハリンと北海道で体系的に飼養されたとみなせるのは、イヌとイノシシ類のみであった。これらの飼養は、第 3 章と第 4 章ですでに論じたように、続縄文文化やオホーツク文化において内的に発生したものではなく、周辺文化との関わりを通じて導入されるに至ったものである。繰り返し述べているように、動物飼養の受容は、物質資料のそれとは異なり、生体を受け入れた後に、拘束し給餌を行いながら複数世代にわたって維持していくことが必要となる。そのため、これらの飼養を生業体系に組み込むにあたっては、それを受け入れた続縄文文化やオホーツク文化の担い手の主体的な意志が不可欠であったといえる。そしてこのことからすれば、イヌとイノシシ類の飼養は、当該期にサハリンや北海道に居住していた人々によって、選択的に採り入れられた生産活動であったと理解することができよう。

サハリンと北海道において飼養動物として受け入れられたイヌとイノシシ類は、ともに

雑食性であり、当地域に豊富にある水産資源や人間の食料残滓の他、排泄物をも食することのできる広い食性を持つ（註 13）。さらに、どちらの動物も、体躯はあまり大きくなく、性質も獰猛ではないため、生体を維持するのに係る人間側の負担はそれ程大きくなかったものとみなすことができる。中でも、大陸由来とされるイノシシ類は、海路を含めた比較的長距離の移動を経てサハリンや北海道までもたらされたことが明らかであるため、そのような移動に耐え得る形態や生態、性質的特徴を有していたことが、野生種の生息圏外である当地域で飼養が受け入れられた要因の一つであろう。

続縄文時代からオホーツク文化期に併行する時期に、アムール河中・下流域に分布したウリル文化やポリツェ文化、靺鞨文化では、動物飼養が発達していたことが知られる（Деревянко1973、1976、1978、2000、菊池 1976、加藤 1979、1980、榎本 1978、1986 など）。そこでは、イヌやイノシシ類だけでなく、ウマやヤギも飼養されていたが、これら大陸の諸文化と何らかの関係を有していたと見られる続縄文文化やオホーツク文化では、これまでのところ、ウマやヤギが受け入れられたことを示す考古学的証拠は得られていない。これは、ウマやヤギの食性が草食性であるために、海岸付近に居住し、水産資源に依存したサハリンや北海道の住民にとっては、その飼料の確保が困難であったためとみられる。このうち特に、ウマに関しては、前述した食性の問題に加え、体躯の大きさが、海路を含めた長距離の移動に適さなかったものとみなせよう。また、サハリンに自然生息し、民族誌時代にはウィルタによって盛んに飼養されたトナカイも、オホーツク文化期以前には飼養されていなかったことが明らかであった（第 5 章参照）。これは、草や地衣類を求めて絶えず移動するトナカイの性質が、海岸付近で比較的定住性の高い生活を営んだ当地域の生活体系にそぐわなかったためであろう。このことは、民族誌時代にアムール河下流域からサハリン中部で漁撈や海獣狩猟を主たる生業としたニブフがトナカイをあまり利用しないことや（Ivanov et al.1956）、トナカイ飼養民として知られるカムチャッカ半島のコリヤークの中でも、漁撈や海獣狩猟に従事し、定住性の高い「海岸コリヤーク」がトナカイでなくイヌを盛んに利用すること（Antropova1956a）からも類推することができる。

サハリンと北海道で飼養が確認されたイヌとイノシシ類のうち、イヌは、人類史上、もっとも広い用途で用いられた動物であり、民族誌時代の北東アジアでは、主として橇の牽引や猟の補助、飼養トナカイの監視役としての役割を担ったことが知られる（レーヴィン 1960）。イヌが人間との長い関わり合いの中で食料資源として利用された事例は少なくないが（Kerstin1969）、そのような利用は副次的である場合が大半で、本来は先に示したような使役用としての役割を担っていることが多い。一方、サハリンと北海道では、イヌの飼養が盛行する続縄文時代からオホーツク文化期を通じて、イヌが食料資源や道具素材としての役割を担い、使役用としては利用されていなかったことが明らかとなった。これは、ヒグマをはじめとする陸獣類の狩猟が割合多く行われた北海道本島においても同様であり、管見の限り、猟犬としての利用が想定し得るような老齢な個体や埋葬などの特異な出土事例は確認されていない。続縄文文化の一部地域やオホーツク文化のように、食料資源とし

て盛んにイヌを利用した事例は、沿海州の沿岸部に所在した初期鉄器時代のペスチャヌイ遺跡 (Ермолова1963) や、オホーツク文化期に併行する時期にオホーツク海北岸にあったトカレフ文化 (佐藤 1996) (図 1) においても認めることができ、このようなイヌ利用が、橇の牽引という用途の出現する以前に、北東アジア沿岸で発達を見た点は注目される。

また、イヌは、ニブフやコリヤーク、アイヌの例にあるように、クマ祭りや葬送儀礼に際して生贄として用いられたり、交換財として用いられたりすることも少なくない (ロット・ファルク 1980 [1953]、Ivanov et al.1956、Lydia1973、クレイノヴィチ 1993 [1973]、更科源・更科光 1976)。これは、イヌが橇やボートの牽引、食料資源、道具素材などの多岐にわたる重要な用途を担っていたために、実用的価値だけでなく、精神的にも高い価値が見出されていたものと理解することができる。一方、オホーツク文化では、前述したように、イヌが使役用として利用された例が見出し得ないにも関わらず、中期以降には、精神的価値が付加されたことを示す出土事例が認められるようになる。このことは、イヌに対する特異な精神観が、使役という用途に伴わなくとも出現する可能性を示唆しており、人間とイヌとの関係史を復元する上で注目されよう。

北東アジア沿岸の海獣狩猟文化において、イヌが盛んに利用されたのは、オホーツク文化やトカレフ文化においてであり (註 14)、その後の民族誌時代を含めれば、水産資源への依存度の高いニブフ (Ivanov et al.1956、Lydia1973) や海岸コリヤーク (Antropova1956a)、海岸チュクチ (Antropova・Kuznetsova1956)、アリユート (Antropova1956b)、エスキモー (Menovshchikov1956) などの例を挙げることができる。前述したように、前者の 2 つの海獣狩猟文化と後者の民族例とでは、イヌの用途が大きく異なるが、これらはいずれも、「比較的高緯度」な「沿岸」地域に分布している点で共通性が認められる。このような地域では、豊富な水産資源を背景とした漁撈や海獣狩猟が発達する一方で、寒冷な気候のために、野生植物が少なく、農耕をはじめとした植物の栽培が発達し難い状況にある。また、高緯度な沿岸地域で動物を飼養するにあたっては、対象となる動物が飼養に適した生物特性を具備していることはもちろん、寒冷な気候への耐性や水産資源をも飼料とすることのできる食性が求められる。そのため、北東アジア沿岸では、水域での生業活動に加えて、寒冷な環境に強く、雑食性であるイヌの飼養が特に発達を見たのである。そして、この点からすれば、縄文文化の一部やオホーツク文化についても、北方狩猟社会に特有な動物飼養が営まれたものとみなすことができよう。

イヌと並んで飼養されたイノシシ類は、家畜化されて以降現代まで、その主たる用途が食料資源に限られた特異な動物であり (Bökönyi1974)、オホーツク文化期においても、生きた保存食料としての役割を担っていたことが明らかであった。

イノシシ類は、オホーツク文化を除いた北東アジア沿岸の海獣狩猟文化では未見であり、比較的高緯度な地域では、民族例を含めても、その飼養が確認されていない。これは、野生イノシシの自然生息域がアムール河下流域から日本列島では東北地方を北限とすることからも明らかのように、寒さや雪に弱いイノシシ類の性質によるところが大きい。野生種

の生息圏外にあたるサハリンから北海道にかけて分布したオホーツク文化では、一部地域でその飼養が盛行するが、これは、同文化が、古くからイノシシ類飼養を盛んに行ってきた大陸の諸文化と接触を持って展開を遂げたことや、その分布域が北東アジア沿岸の海獣狩猟文化の中でもっとも南部に位置するために（図 1）、気候的に北部と比較してあまり厳しくないことが要因とみなせよう。

オホーツク文化期に併行する時期に、大陸に展開したポリツェ文化や靺鞨文化では、飼養されたイノシシ類の遺存体の一部が墓址や住居址から出土する事例が多く、（Деревянко1973、2000、榊本 1978、黒竜江省文物考古研究所 1989）、それを模った土製品も認められている（Деревянко2000）。そのため、大陸側では、イノシシ類が食料資源という実用的価値に加えて、高い精神的価値をも有していたことが明らかである。一方、これら大陸の諸文化からイノシシ類を採り入れたと見られるオホーツク文化では、その遺存体が遺構に伴って出土する例は稀で、廃棄された動物遺存体の堆積中に散在して検出される例が大半を占める。また、オホーツク文化では、確実にイノシシ類が模られたといえる動物意匠遺物はこれまでのところ認められていない。そのため、同文化では、飼養動物であるイノシシ類の精神的位置づけがヒグマや海獣類といった野生動物に比べて低いことが明らかであり、すでに榊本哲氏（1978）の指摘にもあるように、実用面のみが受け入れられ、その精神的価値までは引き継がれなかったことが見て取れる。そして、このことから、さまざまな物質資料を介した交流が長期にわたり認められてはいても、大陸側からサハリンや北海道へと、このような観念の担い手である人々が移住することはほとんどなかったとみなすことができよう。このことは、サハリンと北海道の住民が一貫して狩猟採集民であったことの証左であり、人間の側からすれば不可逆性が強いといわれる動物飼養（フィリップ 1986 [1970]）が、この後、当地域では失われていったこととも無関係ではなからう。

以上、検討してきた内容から明らかなように、サハリンから北海道では、オホーツク文化の母胎となる続縄文文化の段階ですでに、北方狩猟社会に特有であるイヌ飼養を具えており、さらに、オホーツク文化が大陸の諸文化と接触を持って展開を遂げたことから、イノシシ類飼養をも採り入れるに至った。このように、オホーツク文化が北方狩猟社会と農耕国家社会やその周辺文化との接触地帯で展開し、イヌとイノシシ類という 2 種の飼養動物を持ち得る地理的・文化的位置にあったことは、北東アジア沿岸に広がる海獣狩猟文化の中でも、同文化のみに認められた特質である。そして、これら 2 種の飼養動物を採り入れたことにより、オホーツク文化の生業体系はより複合的で特異なものへと変化し、不安定要素の高い水産資源に依存した海洋的な生活を克服し、海獣狩猟文化として高度な海洋適応を実現した要因の一つとして寄与したものとみなし得る。また、このことは、オホーツク海沿岸地域に展開した古コリヤーク文化やトカレフ文化、さらには、民族誌時代の海獣狩猟文化などとの共通性を示唆するものといえよう。

註

- (1) トナカイのように、草や地衣類といった人間が食することのできないものを飼料とする動物は、これにあたらぬ。
- (2) サハリンでは、戦前の調査で縄文土器が出土しており、道北端部に所在する縄文時代の遺跡も割合多く認められていることから、その分布が宗谷海峡以北にまで及ぶものと予想されていた。しかし、近年のサハリンでの調査増加を受けても、これまでのところ、確実な縄文文化の遺跡は未確認である（杉浦 2001）。
- (3) サハリン中部のザーパトナヤ 5 遺跡では、ザーパトナヤ 10 タイプ土器とともに白滝産と置戸産の黒曜石が得られている（奥水・野村 1990）。ただし、この黒曜石が、ザーパトナヤ 10 タイプ土器のうちのいずれの群に伴うものかは明らかでない。また、ザーパトナヤ 1 遺跡でも、サハリン南部に主として分布する続縄文文化（アニワ文化期）の土器とともに、黒曜石製の石鏃やスクレーパーなどが得られている（Федорчук 1995）。これについての産地同定はなされていないが、黒曜石の原産地は、ウラジオストック周辺以北からアムール河下流域、サハリンではこれまでのところ確認されていないため（佐藤他 2002）、北海道産である可能性が高い。
- (4) 筆者が参加した礼文島における海獣類の生態調査（1999 年 1、2 月に実施）の際にも、天候不良のために、動力付きの漁船が出漁できない日が多くあった。また、冬季には、大型客船が欠航することも少なくない。
- (5) 筆者分析による。
- (6) リュトガ 3 遺跡、ソロビョーフカ遺跡、カミサンノサワ遺跡については、筆者分析による。
- (7) プロムィスロヴォエ 2 遺跡では、出土獣類（海獣類・陸獣類）に占めるイノシシ類の最小個体数の割合が約 22.7%（内山 2002a、b）であるのに対して、香深井 1 遺跡では、その割合が高い魚骨層 I や魚骨層 II においても 10% 程である。なお、定量分析の結果は提示されていないが、リュトガ 3 遺跡やソロビョーフカ遺跡、カミサンノサワ遺跡では、イノシシ類が海獣類よりも多く出土しており、獣類の主体を占めることが筆者の実見により明らかである。また、イワノフカ遺跡では、出土獣類（海獣類・陸獣類）に占めるイノシシ類の完形骨と破片骨（表採資料を含む）の割合が 30% を超える。
- (8) イワノフカ遺跡（Арексеева・Голубнова 1993）では、出土獣類（海獣類・陸獣類）に占めるイヌの完形骨と破片骨（表採資料を含む）の割合が 1% にも満たない。
- (9) 大井晴男氏（1988）によって、道北部で真冬（1、2 月頃）に主として捕獲されたと想定されているマダラ（図 2）も、その回遊ルートや延縄による現代のマダラ漁の聞き取り内容から、初春と見る見解がある（図 3）（大森司 1983、内山 2001）。
- (10) ニブフが、イヌに生き残る力を付けさせるために飼料を何も与えず、お腹を空かしたイヌが家の周りを歩き回り、生ごみに食欲に飛びついたとする記述もみられる（Black 1973）。
- (11) アムール河下流域からサハリン中部に居住したニブフは、男性が漁撈や狩猟、それらに用いる道具類の製作、運搬に用いる滑車装置や道具の製作、薪の運搬や鍛冶屋の仕事を行い、女性が毛皮の加工処理やシラカバの皮の準備、編み物や衣服への装飾、シラカバの皮を用いた道具

の製作、植物の採集、家事、イヌの世話をを行ったという (Ivanov et al.1956)。

(12)表 46 に挙げた項目以外にも、土器や墓制などにおいて、明瞭な地域差の存在することが指摘されている (天野 1975、大井編 1982、高島 2003 など)。

(13)イノシシ類については、その飼料の一部として、栽培した雑穀や豆類が与えられたとする見解がある (山浦 1982)。オホーツク文化期には、アワ、キビ、オオムギといった栽培植物の出土が認められているが (山田・椿坂 1995)、それらが食料資源に占める割合がそれ程高いものであったとは認め難い。そのため、ウリル文化のイノシシ類飼養について加藤晋平氏 (1979) が、「農耕の初期段階において、未熟な技術のもとによろやく手に入れた収穫物を、ブタの飼育に与えることがあったであろうか」(107 頁) と疑問を呈したのと同様に、オホーツク文化期に栽培植物が飼料として利用された可能性は低いのではなかろうか。

(14)図 1 に示したその他の海獣狩猟文化では、動物遺存体の報告例が乏しいため、イヌ飼養の程度は不明である。